
サドで邪悪な召喚獣 i f ~ another sky ~

まあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サドで邪悪な召喚獣if\another sky\

【Nコード】

N2421Y

【作者名】

まあ

【あらすじ】

サドで邪悪な召喚獣のifシリーズです。今回はヒロインを島田美波に置かせていただきました。

美波が日本に帰る数日前に理音と美波はドイツの空の下で出会います。

その出会いの中で生まれた淡い恋心は別々の空の下でどのように成長していくのでしょうか？

個人サイト『悠久に舞う桜』でも連載しています。

第1問

(……来週には日本か？ 日本語なんてわからないし)

公園のベンチで1人の少女『島田美波』は空を見上げて小さなため息を吐く。

(……日本になんか行きたくない。でも、葉月が泣いちゃうし)

美波は両親の仕事の関係で幼い日からドイツで暮らしており、両親の仕事で日本に戻る事になったのだが暮らし慣れたドイツを離れたくない思いが強いようでもう1度、ため息を吐いた時、

「下がれ！！ この子がどうなっても良いのか！！」

「へ？ な、何？ 何なの？」

「騒ぐんじゃないねえ！！ 死にたいのか！！」

ナイフを片手に周りを警戒する男性が美波をつかみ、彼女の首筋にナイフの刃を当てると美波はいきなりの事で声をあげるが男性は興奮しているようで美波を怒鳴り散らす。

「……まったく、バカな事をしていないで、ばばあから奪った荷物を返して、そいつを解放しろ。今なら許して死なない程度に痛めつけるだけで許してやる」

「だ、黙れ！！ 近づくんじゃねえよ！！ ガキのくせに俺をバカにしやがって」

「……ばばあを吹っ飛ばして荷物を盗んだバカをバカにして何が悪い。道徳も知らんバカが偉そうに言うな。へどが出る」

「ちょ、ちよつと、あんた、何、挑発してるのよ!? 見てよ。今、女の子がピンチなのよ」

その時、1人の無表情な少年がこちらに近づいてくると男性は少年にナイフを向けるが少年の表情は変わる事も美波の事など気にかけている様子もなく美波は声をあげると、

「ん? すまん。胸がないから、女だと気付かなかった」

「何ですって!! ちよつと放しなさいよ!! あの男、私が気にしている事を!!」

「さ、騒ぐな!?!」

少年は気にする事ないばかりか美波の気にしている少し周りの同じ年の少女達より寂しい胸をバカにされた事に少年を怒鳴りつけると男性は声を上げた美波の様子に驚いた時、

「……死ね」

「な、何なの!?!」

少年の腕にはなぜか打ち上げ花火が握られており、美波を人質に取っていた男性の腕を撃ち抜いた後に花火は美波の身体に当たる事なく男性を撃ち抜いて行き、男性の手から美波が放れる。

「115」

「へ!？」

少年は男性の手から美波が放れた瞬間を見逃す事はなく、美波の手を握りしめると美波を引き寄せ、美波は少年の腕の中にすっぽりと収まると、

(……な、何?)

美波は自分を抱きしめている少年の顔を見上げると少年の顔は奇麗に整っており、悪態を吐きながらも自分を助けてくれた少年の体温に自分の体温があがって行くのを感じる。

『ご協力ありがとうございました!？ ま、前田博士!？』

「前田博士?」

「ん? どうかしたか」

騒ぎの原因になっていた男性は駆け付けてきた数名の警察官に取り押さえられ、警察官の1人が少年に頭を下げようとした時、少年の顔を見て驚きの声を上げると美波は首を傾げながら少年の顔をもう1度見上げるが少年は警察官が驚いている意味がわからないように首を傾げると、

「俺の事は気にしないで良い……悪いな。ケガはないか?」

「ちょ、ちょっと、何よ?」

少年は美波の顔を覗き込むと彼女にケガはないかと確認し始め、美波は目の前に映る少年の顔を見て、少年から視線を逸らす。

第2問

「小さいが擦り傷が付いてるか」

「ちょ、ちよつと、近い!? 近いわよ!？」

「動くな……これで良いな」

少年は美波の顔を覗き込むと頬には小さな擦り傷があったようで懐から小さな薬瓶を取り出すと美波の頬に薬を塗り、絆創膏を貼りつける。

「あ、ありがとう」

「ん? 気にするな。巻き込んだのは俺じゃないな……文句はあの窃盗犯に言え」

「言えるわけがないでしょ……あれ? あんたって日本人?」

美波は少年にお礼を言うと少年は美波に自分が頭を下げる理由はないと思つたようで美波に警察官に捕まっている男性を指差すが美波は少年の様子に大きく肩を落とした時にドイツ語で会話をしていたため、気づくのが遅れたが少年が日本人だと言う事に気づき、

「ああ。そつだ。前田理音だ」

「わ、私は島田美波よ」

少年は自分の名前を『前田理音』と名乗ると美波は慌てて自分の名

前を名乗ると、

「あんだ、日本人なのになんでドイツにいるの？ 両親の仕事の關係？」

「いや、今は学会で新技術発表があつてな。1週間程度ドイツに滞在する予定だ」

「学会？ 新技術発表？」

美波は理音がドイツにいる理由を聞くが理音の口から出る言葉は明らかに同年代の少年から出る言葉ではなく、美波は首を傾げる。

「説明が面倒だな。これで良いか？」

「名刺？ ……えーと、どう言う事？ あんだ、私と同じ年くらいでしょ？」

「ん？ 簡単に説明すると俺は天才と言うものに分類されるわけだ。理音は説明が面倒なように懐から名刺を取り出して美波に渡すとその名刺には少年がアメリカの大きな研究所の研究員である事を示しており、美波は理音の経歴が信じられないように目を白黒させるが理音は気にする事なく、自分を天才だと言い切り、

「天才？ あんだが？」

「ああ。世間一般ではそう言われるらしい。別に興味などないがな」

美波は理音の顔と名刺を交互に見比べ、その行動は理音の事を知っ

ている人間から見るとかなり失礼なのだが理音は気にする事はなく、

「悪いな。俺はそろそろ、行かないといけないんだが」

「あ、あのさ。ちょっと待って。あんたって天才なのよね？ 日本語ってわかる？」

「……何を言っているんだ？ 美波だったか、お前も日本人だろ」

理音は時間を確認すると時間がないのか歩き出そうとするが、美波は何かあるようで理音の腕をつかみ、日本語を教えて欲しいと言出し、理音は美波の言葉に意味がわからないようで首を傾げる。

「そ、そうなんですけど、私、小さい頃からドイツに住んでるから日本語ってわからないのよ。それなのに来週には日本に帰る事になって、日本語がわからないし」

「そう言う事か？ ……悪いが何を当たってくれ。俺はそんなにヒマじゃない」

「ちょっと待ってよ。お願いよ」

美波は今の自分の状況を放すと理音は状況を理解したようだが自分に彼女の相手をする理由がないため歩き出そうとするが美波は必至なようで理音の腕に抱きつき、

「……しつこいぞ」

「良いでしょ。天才なんだから、それくらい手伝ってよ」

理音は美波を引きずったまま歩きます。

第3問

「……ここまで付いてくるとはお前はバカか？」

「う、うっさいわよ。だいたい、あんたが私に大人しく日本語を教えてくれれば良いわけでしょ」

結局、美波は理音の泊まっているホテルまで付いてくると理音は根負けしたようで大きいため息を吐いて美波を自分の借りている部屋まで招きいれるが美波は理音の態度に文句があるようで頬を膨らませ、

「まったく、日本語を教えろと言うのにまったくの無計画なのか？
だいたい、1週間程度で覚えられるほど、お前は賢いのか？」

「それを考えるのが天才のあんたでしょ」

「……まったく、簡単に言ってくれろ」

理音は美波の様子に眉間にしわを寄せて1週間程度で何ができるのか聞くが美波は頬を膨らませたままである上に特に何も考えていないようで無責任に理音で任せるつもりのように理音はその様子に大きいため息を吐く。

「だいたい、日本語なら両親に教わるのが普通だろ。それも普通に考えて会ったばかりの人間の後にホイホイ付いてくる人間がどこにいる？」

「ちょ、ちょっと、何する気よ!？」

理音は美波の行動は常識から外れていると彼女との距離を詰め、美波は理音に襲われると思ったようで理音を押しつけようと手を伸ばすが、

「そんな貧相なものに欲情などするか」

「な、何よ！！ その態度は」

理音は美波の手を交わして彼女から離れると美波の胸ではそんな気分にはならないとため息を吐き、美波は気にしている事をバカにされたため、理音を怒鳴りつけるが、

「……落ち着け。だいたい、文句を言いたいののはこつちだ。俺はお前を助けてもなんの得もないんだぞ。だいたい、さつきも言ったが日本語なら両親に習えと言うか日本に戻る事も考えられる仕事だったんだろ。それを怠ったのはお前の両親だろ。なぜ、俺がお前の両親の尻拭いをしないといけない」

「そうかも知れないけど」

「まったく」

「ダ、ダメよ。私だっていろいろと、理、理音は確かにキレイな顔をしてるし、助けてくれた時はちよつとカッコイイかも？ とか思っただけど、やっぱり、会ったばかりなわけだし」

理音は落ち着いた様子でもう1度、美波に両親に日本語を習うように言うが美波は何かあるのか首を横に振り、理音はため息を吐くと彼女の頬に手を伸ばし、美波は理音の先ほどの行動もあるのか顔を

真っ赤にしておかしな事はしないでと言っ。

「……だから、何度も言ってるだろ。おかしな勘違いをするな。美波、お前の日本に帰った時の住所を教える。必要なものができたら送ってやる」

「う、うん。ありがとう。えーと、ダメよ。私、漢字が書けないのよ」

理音は何か思いついたようで美波に日本に帰った時の住所を聞くと美波は理音の言葉に大きく頷くと日本の住所を書こうとするが住所を日本語で書けない事に気づき、

「……お前、本当に頭は大丈夫か？」

「な、何よ？」

「携帯は持っているか？ メールアドレスでも良い。わかったら、このアドレスに住所を送信しろ。必要なものができたら、送ってやる」

「う、うん。そうする。ゴメンね。迷惑をかけて」

「そう思うなら、熱くなるな。頭に血が昇っている間は間違った事しかできなくなるぞ」

理音は美波の様子に完全に呆れており、美波は理音の様子に流石に悪い事をしている事に気付き始めているようで申し訳なさそうな表情をして謝り、理音はそんな美波の様子に表情を変える事なく言う。

第4問

「理音、こんなところで何してるの？」

「ん？ 美波か？ ……なんだ？ この小さな生物は？」

美波は理音と出会った翌日に、彼と出会った公園を妹の『島田葉月』の手を引いて散歩していると理音がベンチに座り、空を眺めているのを見つけて声をかける。

「小さな生物じゃないです。葉月は葉月です」

「……そうか」

「理音、この子は私の妹の葉月よ」

葉月は理音に小さな生物と呼ばれた事が不服なようで頬を膨らませるが理音は気にする事なく空を眺めており、美波はそんな理音の様子に苦笑いを浮かべると理音に葉月を紹介し、

「お姉ちゃん、このお兄ちゃんはお姉ちゃんの彼氏さんですか？」

「は、葉月！？ いきなり、何を知ってるのよ!？」

葉月は理音の隣に座って、理音の顔を覗き込むと葉月は美波に理音は彼氏かと聞くと美波は葉月の言葉に驚きの声をあげる。

「……小さな生物、何をおかしな事を言っているんだ」

「葉月です」

「……葉月、おかしい事を言うな。現状で言えば、お前の姉は俺の依頼人であるだけだ。依頼料の交渉はまだだがな」

理音は葉月のおかしな勘違いを否定すると理音は美波から1つの依頼を受けているだけだと話し、

「そうなんですか」

「……」

葉月は少しだけつまらなさそうな表情をする隣で美波は少しだけ理音が自分の事を何とも思っていない事にショックを受けているようであり、

「それで、こんなところで何をしてるの？」

「ん？ ああ。美波、お前を待っていたんだ。これを渡そうと思っ
てな」

「何これ？ USB？」

葉月は自分が理音の言葉にショックを受けるはずはないと大きく首を振ると理音に公園にいる意味を聞き、理音は欠伸をした後、ポケットからUSBメモリーを取り出して美波に渡すが美波は意味がわからないように首を傾げる。

「簡単な独和と和独の辞書のようなものだ。一般的な会話で使うものなら、それでしばらく勉強している」

「これ、私のために作ってくれたの？」

「……そう言う約束だろ。まったく、忙しいなか、作ってやったんだ。無駄にするなよ」

「う、うん。ありがとう」

理音はUSBメモリーの中にあるものを説明するとあまり寝ていなかったのか欠伸をしながらベンチから立ち上がり、美波は愛想こせないが自分のわがままを聞いてくれる理音の事が気になるようであらちらと理音を見ながら礼を言い、

「それじゃあ、俺はホテルに帰るぞ」

「ひよ、ひよっとしてこれを渡すために待っていてくれたの？」

「……バカな事を言うな。散歩のついでだ。飯にあったら一手間減るだろ」

「お兄さん、お腹減ってるですか？」

理音はホテルに帰ろうとすると美波は理音がこのためだけにいつくるかわからない自分を待っていてくれたと思ったようであり、顔を赤らめるが理音にはそんな気は全くなく、美波にバカを見るような視線を向けた時、理音の腹の虫が鳴き、葉月は理音の様子にくすくすと笑う。

「……ああ。そう言えば、昨日から何も食ってなかったな」

「き、昨日って、理音、あんだ、何をしてるのよ？」

「ん？ 気にするな。こんなのはいつもの事だ。何かに集中し始めると睡眠も食事も身体も脳も忘れる」

理音は表情を変える事なく、食事をとっていなかった事を白状すると美波は慌てるが理音にとっては日常茶飯事の事のようにであり、

「そんな大切なものを忘れるわけがないでしょ。ちょっと、来なさい。葉月、帰るわよ」

「ハイです。お兄さんも行くです」

「待て。どうして、そうなる？」

「良いから、来なさい。これのお礼とでも思っっていなさいよ」

美波は理音の腕をつかむと理音を引きずって歩きだし、葉月は理音と美波の様子に何かを感じているのか嬉しそうな表情で理音の手を握り、美波と葉月は理音を自分達の家に連れて行く。

第5問

「……お前は何がしたいんだ？」

「見ればわかるでしょ。お昼ご飯を作るのよ。あんたも食べていきなさい」

理音は美波の家まで引きずられて行くと美波はエプロンをつけて理音の分も昼食を作るようだが、

「……美波、昨日も言ったが、お前、バカだろ」

「な、何よ。それは!!」

「……包丁を向けるな」

「お姉ちゃん、危ないです」

理音は美波をまたバカ扱いし、美波は理音の言葉が頭にきたのか包丁を理音の向ける。

「昨日も言ったが、あつたばかりの人間を信用するな。昨日は俺の宿泊先のホテルに今日は後数日で引越すとは言え、自宅に引き込むな。俺がおかしな趣味を持っていたら、お前も葉月もそこで終わりだ」

「あ、あんたはそんな事は絶対にしない」

理音は表情を変える事なく、自分が犯罪者だった場合の事を考える

と理音の様子は冷たく寒気のするように変わって行き、美波は理音の様子に息を飲みながらも美波は理音は自分や葉月を傷つける事はないと言い切るが、

「なぜだ？ 少なからず、俺は自分を人殺しだと認識してるぞ」

「な、何を言ってるのよ？」

理音は表情を変える事なく、自分を『人殺し』だと言い切り、美波は理音の言いたい事が理解できないようである。

「お兄さん、どうして、そんな嘘を吐くですか？」

「別に嘘ではないな。俺は人殺しだ。助ける事もしたが助ける事が出来なかった命ものも多くあるからな」

しかし、葉月は気にする事なく、理音が人殺しだと言う意味を尋ねると理音の無表情な顔は少しだけ悲しそうに歪むが直ぐに無表情に戻り、

「助けられなかった命？」

「何だ？ 昨日の名刺にも書いていたはずだ。専攻は薬学だが外科的手術だっけで行く。だいたい、今回の学会もそのためにきているんだ」

「お兄さん、お医者さんなんですか？ 凄いです。葉月、感激です」

美波は理音の口から出た言葉に頭が処理しきれないようできょとんとした表情をすると理音は自分は医療従事者だと話し、葉月は理音

の手を取って楽しそうに笑っている。

「そ、そうなら、おかしい方をしないですよ」

「おかしい言い方だとしても事実だ。俺は人殺しでお前の行動は迂闊だと言う事くらいは頭に入れておけ。お前が『家族の死』にまで責任を持てるなら何も言わないがな。最近は日本も治安は悪いようだしな。少しは考えて動け」

美波は状況が理解出来たようで安心したのかゆっくりと息を吐きだすと理音は美波の迂闊な行動にため息を吐き、もう少し考えて行動するように言い、

「わ、わかったわよ。反省するわ」

「そうしろ」

美波は理音の言葉に頷くと理音は短く返事をする。

「私はご飯を作るから居間で待ってて、引越しの準備をしているから、少し荒れてるけど、葉月、理音を案内して」

「はいです。お兄さん、行くです」

「ん？ 気にするな。俺の部屋に比べると何でもない」

「……あんだ、どんな荒れたところに住んでるのよ」

美波は葉月に理音を居間に連れて行くように言い、葉月は理音の手を握って理音を引っ張って歩きだし、理音は葉月の後を付いて歩い

て行く。

第6問

「葉月、寝ちゃったの？」

理音は昼食をぐちそうになった後に葉月の相手していたのだが、葉月は理音と一緒にいるのが楽しかったのか理音の膝の上で小さな寝息を立て始めている。

「……なんだ？」

「葉月が、理音に懐いたのが、ちょっと意外だっただけよ。ねえ、あんたつて、弟か妹っているの？」

美波は葉月の様子にくすりと笑うと無表情ながらも、葉月の手をしっかりとしてくれていた理音に弟か妹がいまいかと聞くと、

「……年の離れた弟はいるが、3年会ってないからな。俺の顔も覚えてないだろ」

「3年？」

「小学校の卒業を同時に留学と同時に研究所に入ったからな。日本にはそれ以来、戻ってもいない」

理音は弟がいるがまったく会っていないと言うと小さな寝息を立てている葉月の頭を撫で、

「そっか。弟くんは寂しい思いをしてるかもね」

「さあな。俺がいない方がいいだろうから、そんな事は思っ
てはな
いだろう」

美波は理音の弟は寂しい思いをしているかも知れないと言うが理音
は首を振る。

「そ、そんな事はないわよ。きっとさびしいはずよ。あんただって
年中無休なわけじゃないでしょ。時間があつたら、それこそ、日本
でだって学会とかあるんじゃないの？ その時にでも帰つたら……
理音、ごめん」

「別に気にする必要はない。お前には関係ない事だ」

「関係ない？ そ、そうよね」

美波は理音に日本に帰ってやるように言うが、その時に理音の表情
が歪んだ事に気づき、彼に謝ると理音は感情的で短絡的に動く美波
に話しても意味がないと思っ
ているようであり、理音は美波には関
係ないと言い切ると美波の胸は小さく痛むが彼女自身もこの痛みが
何か気付いていないようであり、慌てて頷くと、

「美波、葉月はどこに運んだら良いんだ？ 俺はそろそろ出ないと
学会に間に合わなくなるんだが」

「へ？ ちょ、ちょっと、学会って今日なの！？」

「ああ。それで、どうしたら良いんだ？」

理音は膝の上の葉月を抱きかかえると美波に葉月を起こさずにベッ
トまで運びたいようである。

「ちょ、ちよつと、そんなに落ち着いていて時間に間に合うの？」

「これ以上、遅れると間に合わないと言っているだろ。まったく、美波、お前は人の話を聞く気はあるのか？」

美波は理音に時間がない事を聞いて慌てるが理音本人は彼女とは対照的に妙に落ち着いており、

「えーと、こつちに来て、葉月の部屋に案内するから」

「ああ」

美波は理音を遅刻させるわけにはいかないため、慌てて葉月の部屋に理音を案内して理音は葉月をベッドに下そうとするが葉月はしっかりと理音の上着のシャツをつかんでいる。

「……困ったな」

「葉月、手を放してよ」

理音は力づくで葉月の手を話すわけにもいかないと思っているようで眉間にしわを寄せると美波は理音に時間がない事もあり、慌てているが、

「仕方ない。取りにくる暇はないから、捨ててくれ」

「え！？ ちよつと、理音！？」

「悪いな。時間がないから、帰らせて貰う」

理音はTシャツの上にシャツを着ているため、シャツから腕を抜くと急いで帰る準備をして玄関に歩いて行き、美波は慌てて理音を見送るために玄関まで追いかけて行くと、

「本当に間に合うのよね？」

「ああ。時間がないから、行くぞ」

「う、うん。あ、あのさ。理音！？ ちょ、ちょっと、何するのよ！？」

理音が帰ろうとする姿に美波は何かあるのか理音を呼び止めた時、彼女の頭に理音は手を伸ばし、

「例え、引越したとしても何も変わらない。お前にはドイツ（ここ）にいたと言う事実があつて、仲間はずいいるんだ。1人だと思ふ必要はない」

「そ、そうよね」

「な、何だ？」

「いや、あんたがそんな事を言ってくれるなんて、思わなかったから」

美波は理音が自分の事を心配してくれている事に意外そうな表情をする。

「そうか……いや、ただ、今のお前を見ているとあの日、俺が帰る

場所を捨てた時にあいつが言ってくれた言葉を思い出したただけだ」

「あいつ?」

「……そうだな。一事で表すと安っぽい気もするが『親友』だと思いたい。あいつの言葉があったから、『俺達はまだ壊れないでいられる』んだ」

理音は日本を出た日の事を思い出したようで柔らかい笑みを浮かべると美波の胸は理音の笑みを見て小さく脈打ち、彼女の顔は真っ赤に染まって行くが、

「じゃあな。また、どこかで」

「う、うん。理音、またね」

理音は美波の変化に気づく事なく駆け出して行き、美波は理音の背中中に小さな声で一方的に再会を誓う。

第7問

「シマダミナミです。よろしくお願いします。マダ、上手くニホン語が話せません」

『島田美波さんはドイツからの帰国子女だそうです。日本にはつい最近、帰国したばかりなので、皆さん、色々と助けてあげてください』

(……私、何かした?)

美波はドイツから帰ってくると高校時代を3年間過ごす事になる文月学園に入学してクラスでの自己紹介をしているなか、クラスメイト達は美波の自己紹介にくすくすと笑っている。

『島田さん、大丈夫ですよ。漢字は徐々に覚えて行けば良いわけですよ』

「よろしくお願いします」

美波は担任教師の言葉で黒板に目を移すとそこで自分の名前を『島田美波』と書いてある事に気づき、慌ててローマ字で『Minami Simada』と書き直すと笑うだけで自分が間違えていた事を指摘してくれないクラスメイト達に不信感を覚えながらも何も言えずに自分の席に戻り、

(……お父さんが言っていた日本と全然違う。本当に日本って大丈夫なの? 理音は日本も安全じゃないって話してたし、本当にやっていけるのかな?)

席に座り、クラスメートの自己紹介を聞いていると日本に戻ってきた事に不安しか覚えないようなクラスメート達が多く、彼女は眉間にしわを寄せているなか、担任は連絡事項を話すと教室を出て行き、その瞬間に帰国子女と言う特殊な人間である美波に興味本位で声をかけてくる。

（話すのが早すぎて何を言ってるか。わからない。どうしよう？

……あっ！？　そうだ。理音から、送られてきたものを使ったら良いんだ）

美波はクラスメート達の質問攻めにどうして良いかわからずに戸惑っているとき、理音から送られてきたものをカバンの中に入れていた事を思い出し、カバンを漁り始めるとクラスメート達は美波の行動に首を傾げるが、

「すみません。もう少し、ゆっくり話してください。聞きとれないです」

美波は小さなディスプレイと入力ボードが付いた機械をカバンから取り出すとドイツ語で入力するとディスプレイには日本語で美波の言いた事が表示され、クラスメート達は見慣れない機械に驚きの声をあげ、

『島田さん、これって何？　……速い？』

「ちょっと待ってください。確か、こうすると……」

理音の作った機械の事に興味が移り、1人の女子生徒が美波に話す速さの事を聞くと美波は理音の翻訳機をいじると日本語入力とディ

スプレイに表示される。

『これ。凄いものだよ。 どうしたの？』

「友達が作ってくれました。言葉が伝わらないと大変だって、言葉は徐々に覚えて行けと言って」

クラスメート達は翻訳機を介して美波に質問を始めるが美波は友達と言ったのだが美波の様子に何かを感じたようでニヤニヤと笑うと、

『ひょっとして、彼氏？』

「ち、違います!？」

『ほう。片思い中か？』

美波と理音との関係を聞くと美波は顔を真っ赤にして否定するがその様子にクラスメート達は生温かい目で見たり、悔しそうな表情をしている生徒達もいる。

『その子ってかっこいいの？ 写真とかないの？』

「……それは言わないとダメなの？」

『良いじゃない。私達はその子と会う事もないわけだし』

クラスメート達の興味は次は理音に移行し、美波は完全に逃げ場所を失う布陣になっており、

「かっこいいと思うけど……性格はちょっと……かなり悪い」

『クール系か？ 名前は』

「前田理音」

『前田理音？ 何、日本人なの？』

美波は無表情で悪態を吐く理音の顔を思い出して小さくため息を吐くと美波から見える同年代の恋愛に女子生徒達は色めき立っており、理音の名前を呼んだ時、

「前田理音？ って、島田さん、リオに会ったの！！」

なぜか女子のセーラ服をきたバカそうな少年『吉井明久』が人波を割って美波に駆け寄ってくる。

第8問

『吉井に前田理音？ 待てよ。前田理音って、昔、噂になった父親を殺したって奴じゃ！？』

「お前、何を知らないくせにおかしな事を言うな！！ リオはおじさんを殺してなんていない。あれは事故だったんだ！！」

美波へ駆け寄ってくる明久の様子に1人の男子生徒は何かを思い出したように理音を『父親殺し』と言うと明久は直ぐに方向をかえ、その男子生徒の胸倉をつかむ。

「あ、あの。何があつたんですか？」

『……………』

美波は目の前のやり取りに何があつたかわからないようでそばにいた生徒に聞くが理音の父親殺しと噂を聞いてしまった生徒達は美波から少し離れてしまい、

『わかつたから、放せよ』

「……………」

男子生徒は明久の様子にこれ以上は何も言わないと手をあげると明久は彼を睨みつけたまま手を放し、

「えーと……………」

美波の前にまで行くと少し悩んだ後、

「吉井明久です。島田さんに聞きたい事があるんだ。リオはあいつは元気にしてた？」

「元気だったと思う。でも、会ったのはドイツから引越してくる少し前」

理音の様子を聞きたいようで美波に聞き、美波は理音と最後に会った日の事を思い出しながら答え、

「そっか。元気にしてるんだ」

「……ヨシい？」

明久は美波の返答を聞いて何かを噛みしめるように呟くと彼の瞳にはうっすらと涙が浮かび、美波は明久の顔を覗き込む。

「う、ごめん。リオが元気ならそれで良いんだ」

「まって、ヨシい……」

明久は泣いている姿を見せられないと思ったようでその場から離れようとするが美波は明久が理音が別れ際で言っていた『理音の親友』だと理解したようで彼の手をつかむと、

「タトえ、ヒッコしたトしてもナニもカワらない。おマエにはココにいたとイウジジつがあつて、ナカまはかなラずいるンダ。1人ダと思うヒツようはない……リオがドイツでワタしにいつてクレたコトバ。シンゆうがくれタイセツなコトバって」

片言だが美波は一生懸命に理音が明久から貰ったであろう、理音の中にある掛替えのない言葉を明久に伝えると明久はその言葉にやはり心当たりがあったようで彼の瞳からは大粒の涙が流れ始め、

「ヨシい？」

「そっか。リオは覚えていてくれたんだ」

美波は明久の様子に戸惑いながらも彼に声をかけ、明久はセーラ服で自分の涙を拭う。

「島田さん、リオの事をもっと教えてくれない？ 連絡先もわかるなら、教えてほしいんだ」

「えーと、これを送ってきてくれた時に連絡先が書いてあったから、家に帰ればわかるけど、明日で良いかな？」

「ありがとう。そうだ。ちょっと、僕、姫路さんにもリオの事を話してこなきゃ」

明久は理音と連絡が取れなくなっていたのか美波に今の理音の連絡先がわからないかと聞くと美波は戸惑いながらも明久の様子に大きく頷くと明久は自分以外にも理音の事を心配している友人がいるように教室を出て行き、

(……あれが理音の親友？ ……何で、女子の制服を着てたんだろっ?)

美波は理音が言っていた人間と明久の姿が合致しないように首を傾

げながらも、

（そっか。この街は理音の故郷なんだ。電話してみても良いかな？
街の事を知りたいとか言えば良いわけだし）

理音へ連絡を取る口実を見つけたためか、少しだけ嬉しそうに笑う
が『父親殺し』の話聞いた生徒達は美波に関わって良いものか考
えているようで彼女から少し距離を取っている。

第9問

「……誰だ？」

「理音、私、美波」

美波は明久の事を報告する口実を手に入れたため、理音に電話をかけると電話の先からは抑揚もなく機嫌が良いのか悪いのかわからない理音の声が聞こえ、美波は理音の声に胸が『とくん』と音を立てるがそれを押さえるように慌てて返事をする、

「ん？ 何の用だ？ 送ったものに不都合でもあったか？」

「そ、そんな事ないよ。凄く役に立ってる。今日もクラスの人達ときちんと話す事が出来たし」

理音は美波からの電話に送った翻訳機が上手く作動しなかったと考えたようだが美波は翻訳機は役に立ったため、直ぐに否定をし、

「ん？ それなら、何の用だ？」

「う、うんとね。私が引越した場所って理音の育った街だったんだね」

「そんな事か？ それだけなら、切るぞ」

理音は美波の用件が理解できないため、電話の先で首を傾げると美波は理音に街の事を聞きたいようだが理音は興味がなさそうに電話を切ろうとする。

「ちょ、ちょっと待ってよ!? な、何で、そんな反応なのよ!?!」

「……電話の先で叫ぶな」

美波は理音の冷たすぎる反応に声をあげると電話の先からは冷静な声で返事があり、

「もう少しあるでしょ。それなら、あそこに行ってみるとか? 昔話に花を咲かせるとか!?!」

「3年も前の事だぞ。それに昔話に花を咲かせるのはお前との共通の話があつてからこそだろ」

「だ、たとしても、何かあるでしょ。そうだ。理音の幼なじみにあつたよ。吉井明久って男の子と後は吉井から、『姫路瑞希』って女の子にも……」

「……美波、電話の先でなぜ、落ち込む?」

美波はこのままでは会話も何も無く、電話を切られてしまうと思いついて話題を振るが理音は別に美波と話するような事はないと言い切り、美波は理音の幼なじみの明久と『姫路瑞希』と出会ったと話すが瑞希の自分とは違い過ぎる胸の成長を思い出したようで声には宝がなくなつて行く。

「べ、別に落ち込んでなんかいないわよ!?!」

「そうか。どうせ、瑞希の成長しすぎた1部分と自分の貧相な1部分を比較しただけだろ」

「なんでわかるのよ!?!」

「図星か……そうか。瑞希は良く育っているようだ」

「あ、あんたは何を想像してるのよ!?!」

美波は落ち込んでなどいないと叫ぶと理音は美波の様子から瑞希の成長具合を推測したようであり、美波は理音の言葉に声を上げ、

「ん？ 瑞希の成長具合だ3年も会っていないがお前の反応から推測するに」

「推測何かしなくて良いわよ!?!」

理音は3年前の瑞希の容姿と美波の様子からリアルに瑞希の胸の成長具合を弾きだそうとするが美波は大声をあげて彼の思考を切り、

「だいたい、何で胸の話に持つて行くのよ？ 女の子に対して失礼でしょ。それに普通は吉井や瑞希が元気だったかって話になるんじゃないの?」

「意味がわからん。元気がどうかはその日の体調だ。俺が聞く理由がわからん。だいたい、アキはバカだから風邪などひかない」

美波は頬を膨らませながら、理音を怒鳴りつけるが理音は美波の反応の意味がわからずに首を傾げる。

第10問

(……まったく、理音ならもう少し優しい言葉をかけてくれるとか無いのかな?)

理音に電話をした翌日、美波は理音の電話での対応が気に入らなかったようで、一人で機嫌が悪そうにしていると、

「島田さん、ちょっと良いかな?」

「ヨシい? ドウかしタ? ミズきも?」

明久と瑞希が美波の席に近づいてきて声をかけてきたため、美波は慌てて理音から貰った翻訳機を取り出す。

「週末って時間ある? おばさん……リオのお母さんに島田さんから、リオの話をしてあげてくれないかな? と思って」

「理音のお母さん? 理音は家族と連絡を取ってないの? 確かに日本には戻ってないとは言ってたけど」

「う、うん」

明久は美波に理音の事を彼の母親である『前田怜奈』に話して欲しいと頼みに来たようだが美波は明久の反応に何か違和感を覚えたようであり、疑問を口にするに明久と瑞希は気まずそうに美波から視線を逸らし、

「どっしって?」

「そ、それは、リオはおばさんの事を誤解したままって言うか」

美波は2人の様子に首を傾げると明久は理音と怜奈の間にある確執を美波に話して良いのかと思ったようであり、

「……理音、家族と仲悪いの？ お母さんと会って事はお父さんと仲悪い？」

「「……」」

美波は明久の様子から理音は父親と仲が悪いと思ったようだが美波の言葉で明久と瑞希は目を伏せると、

「……リオのお父さんは死んでるんだ。リオはそれを自分のせいだと思ってるから」

「そ、そうなの？」

明久は知りあつたばかりの美波に言っても良い事かを悩んだようだが覚悟を決めたようで美波に理音の父親の『海理』が死んだ事を教えると美波は驚きを隠せないようである。

「う、うん。それが理音が留学するきっかけになつたわけでもあるし……」

「そうなんだ。私は別にかまわないけど」

明久はまだ美波に隠している事もありそうだが美波は明久と瑞希の様子から怜奈が悪い人ではないと言う事が理解できたようで頷くが

理音に内緒で怜奈と会う事は良くないこととも思っているように歯切れが悪く、

「あ、あの。美波ちゃん、どうかしましたか？」

「うん。理音の知らないところでそんな事をしても良いのかな？
と思つて、今度、連絡とつた時にその事を話したら、理音の機嫌が悪くなりそうだし……あまり、家族の事って話したからなかったから」

美波は理音の気持ちも考えずにそんな事をしても良いのか考えているように困つたように笑うと明久と瑞希は美波の言い分もわかるように目を伏せるが、

「それでも、お願いできないかな？ おばさんとリオはケンカ別れみたいな感じなんだよ。おばさんはリオの事を心配してるけど、あんな別れ方をしたから、連絡何かできないと思ってるし。近況だけでも教えてあげられたらと思うんだよ」

「……わかつたわ。その代わりに、吉井が理音と連絡をとつた時にその事は話さないですよ」

明久はそれでも怜奈に理音の事を話して欲しいように真つ直ぐと美波を見ると美波は明久の様子に頷いた後にカバンからメモ帳を取り出して1ページを破り、明久に渡すと、

「これは？」

「理音の連絡先、昨日、欲しいって言つてたでしょ」

明久は美波の行動の意味がわからないように首をかしげ、美波は明久の様子に少しだけ呆れたようにため息を吐く。

第11問

「島田さん、リオのおばさんの」

「はじめまして、前田怜奈です。この子は理音の弟の怜生」

「は、はジメました。シマだミナみデス」

美波は明久と瑞希と約束した通り週末に理音の家族である『前田怜奈』、『前田怜生』と会い、明久に怜奈を紹介されて慌てて頭を下げ、

(……キレイな人。理音もキレイな顔立ちをしていたし、やっぱり似てるよね?)

美波は顔を上げた時に目に映った怜奈の顔に理音と怜奈が母親だと言っ事を実感していると、

「そ、それじゃあ、美波ちゃん、前田くんのお話をお願いしたいんですけど、前田くんと知り合った時の事から」

「そ、ソウね」

瑞希は美波に理音の話をしてあげて欲しいと言い、美波は慌てて理音から貰った翻訳機を取り出し、理音の翻訳機を使って怜奈に理音と出会った時の事やその後理音と話した事を伝えようとするが、

「美波ちゃん、理音は元気にしてた？」

「おばさん？」

怜奈は美波の手を止めるとただ一言だけ理音の事を聞き、明久はその様子に怜奈の名前を呼ぶ。

「ハイ。ゲンキデシた。このアイダ、デンワをシタ時も忙しいとは言ってました。デモ、ケンキュウにしゅうチュウするとネナカッタリ、ごはんモ食べなくナルミタイだから、少しシンパイデス」

「そう。元気にしてるのね。良かった……」

美波は翻訳機を使う事無く、理音が元気だと言う事と伝えると怜奈は表情を柔らかくして笑い、

「美波ちゃん、ありがとう」

「おばさん、それだけで良いんですか？ もっと、聞きたい事があるんじゃないですか？」

美波に向かい頭を下げると瑞希はもっと聞きたい事があるのではないかと怜奈に聞くが、

「良いのよ。あの子が元気ならそれだけで……それに私にはあの子を心配する資格すらないんだから」

「そんな……」

怜奈は首を横に振ると明久は怜奈のなかには理音への負い目がある事に気づいているためか目を伏せてしまうと、

「……おかあさん、ぼくはおにいちゃんのお話、聞きたいです」

「そうですね。怜生くんは前田くんのお話、聞きたいですよ」

怜生は怜奈の服を引っ張り、理音の話聞きたい言い、瑞希は怜生の頭を優しく撫でる。

「はい。おにいちゃん、優しいですか？」

「うん。やさしい。クチはワルいけど。ハヅキも直ぐになつイタし」

「葉月？」

「ワタしノイモウトよ」

「そうですねですか」

怜生は記憶にないが兄の話や美波の顔を覗きこんで聞き、美波は幼い怜生では文字が読めないため片言で理音の事を怜生に話をして行き、怜生は美波の話をしつかりと聞きながらも、

「おにいちゃんに会ってみたいです……」

「……怜生」

美波から理音の話聞いた事で怜生は理音に会いたい思いが大きくなってきたよつで小さな声でとつぶやくと怜奈の表情は小さく歪み、

「おばちゃん……」

「大丈夫よ」

瑞希は純粹に理音の事を聞いている怜生とは対照的に理音に対する負い目のある怜奈の表情が曇っている事に気づくと瑞希の表情も暗くなってきたてしまい、怜奈は瑞希の手を取り、少し無理はあるが笑顔を見せる。

第12問

(理音のお母さん、理音とやっぱり会い難いんだよね)

美波は怜奈と怜生と話をした後、家に帰ると怜奈の様子から考える事があったようで自分の机に座り、考え事をしていて、

「お姉ちゃん、お兄さんに連絡をしたいんですけど、お電話番号を教えてくださいです……お姉ちゃん？」

「は、葉月！？　どうかしたの？」

葉月が部屋をノックしてドアを開けるが美波は葉月が入って事に気づいていないようであり、葉月は何かあったのだと思ったようで美波の顔を覗き込んだ時、美波はすぐ目の前に現れた葉月の顔に驚きの声をあげる。

「さつき、お兄さんから荷物が送られてきたです。今度は葉月の分もあるです」

「理音からの荷物？　葉月、お姉ちゃんにも見せて……これ、何だろっ？」

葉月は小さな箱と電話の子機を手にとっており、箱は理音が送ってきたものだと言うと美波は首を傾げた後、葉月の箱を覗き込むとイヤホンのようなものが2つ入っており、美波はイヤホンの1つを手を持ち首を傾げると、

「お姉ちゃん、何かこれに書いてあるです」

「うん。葉月、借りるね」

葉月は箱に付けてあったメモ紙を美波に見せ、美波は直ぐに理音からのメモ紙を覗き込むが、

「……電源を付けて耳に付ける？ もう少し書く事はないのかしら？」

「お姉ちゃん、どうかしたですか？」

理音のメモ紙は本当に簡単にしか書かれておらず、美波は眉間にしわを寄せると葉月は美波の顔を覗き込む。

「とりあえずは理音に電話をかけてみようか？」

「はいです。この間はお姉ちゃん1人でお兄さんと話していたから、今日は葉月もお兄さんとお話したいです」

「うん。わかったわよ。だけど、理音も忙しいみたいだから、無理を言ったらダメよ」

「はいです」

美波は子機を葉月から受け取ると理音に電話をかけ、

「……誰だ？」

「理音、私、美波」

「お姉ちゃん、葉月に代わって欲しいです」

電話の先からは理音の抑揚のない相変わらず機嫌が良いのか悪いのかわからない声が聞こえ、美波は理音の声に慌てて返事をする。葉月は美波に電話を代わって欲しいと手を伸ばすが、

「葉月、ちょっと待ってて」

「美波か？ 今度は何のようだ？」

美波は葉月に少し待って貰い、理音は美波から電話がかかってくる理由がわからないようであり、電話の先で首を傾げる。

「何のようって、今日、また、理音から荷物が送られてきたんだけど、使い方がメモ書き一言ってどう言う事よ？ これじゃあ、何の道具かもわからないでしょ」

「ああ。それか。別に他に書くような事もないからな。形を見ればどうしようするかもわかるだろ」

美波は理音の様子に大きく肩を落とすが理音はその一言で事足りると言いつつ切り、

「そんなわけがないでしょ」

「自分の理解力が足りないのを人のせいにするな」

「あんたがあっさりとしすぎてるのよ！！」

美波は理音の反応に声を張り上げ、

「わかった。わかった。それで何が聞きたいんだ。さっさとしろ。俺はお前の相手をいつまでももしているほどヒマじゃないんだ」

「忙しいの？」

「ああ。少しな」

「ちゃんと、ご飯、食べてる？ 寝てる？」

理音は美波の様子に面倒になってきたのか用件を済ませて電話を切ろうとするが美波は理音が忙しい事に気づき、心配そうに声をかける。

第13問

「栄養を最後に摂取したのは……35時間前、睡眠は72時間前か？」

「あんだ、本当に死ぬわよ!!」

理音は少し考えた後に美波の質問に答えると美波は声を張り上げる。

「……電話で声を張り上げるな」

「良い。時間は無くたって、ご飯を食べて寝なさい。身体を壊したらどうするのよ？ 心配させないでよ」

「お前に心配される理由がわからん。だいたい、自分の身体の事は自分が1番、理解している」

美波は理音の体調を考え、理音に最低限の食事と睡眠を取って欲しいと頼むが、理音は美波の心配を無用だと言い切るが、

「それでもよ。あんだだって私が日本に戻る事を不安だって言ったら励ましてくれたでしょ。なら、私にだって、あんだを心配くらいさせてよ」

「……勝手にしろ。本題に話を戻すぞ。今回、美波と葉月に送ったものは……」

美波はもう1度、理音に言うと言理音は小さくため息を吐くと2人に送った機械の説明を始め出し、今度の機会は入力タイプではなく、

音声を翻訳できるタイプのものだと説明する。

「そんなに凄いものなの？」

「ああ。マイクでお前や葉月がドイツ語を話しても日本語に変換してくれるから、会話はこれでどうにかなるだろ。自分で日本語を話せばドイツ語に変換して聞こえるから1人でも勉強できると思う。後は文字を覚えるのはお前達しただから、これ以上は何もできないからな」

「う、うん。ありがとう」

美波は口は悪くても自分や葉月のために色々なものを作ってくれる理音の声に胸の鼓動が速くなっているのを感じていると、

「お姉ちゃん、葉月もお兄さんとお話したいです」

「う、うん。ゴメンね。葉月、今、変わるから、理音、葉月があんたと話をしたいって」

「ああ」

葉月はいつまでたっても美波が電話を代わってくれない事が不満なように頬を膨らませるため、慌てて理音に断りを入れ、

「お兄さん、葉月です」

「ああ」

葉月に電話を渡すと葉月は理音にお礼を言い、理音は電話先で頷く

が、

「ん？ 忘れていた。葉月、お前も美波もだがそれを学校で使うなら許可を貰えよ。許可も貰わずに使うと面倒な事になるからな」

「はいです」

理音は学校で使うには許可がいるかも知れないと言い、葉月は理音と話をできるのが嬉しいようであり、

(……私ももう少し、素直にお礼を言えば良かったかな?)

美波は純粹に理音にお礼を言える葉月が羨ましく思ったようであり、素直になれない自分の態度にため息を吐いた時、

「お兄さんは日本に帰ってこないですか？ 葉月、また、お兄さんと遊びたいです」

「ちよ、ちよっと、葉月!? いきなり、何を言ってるのよ!?!? 理音は忙しいのよ」

葉月は理音が何をやっている人間なのか理解していないようであり、また遊んで欲しいと言うと美波は葉月の言葉に理音と怜奈との間に何かあった事も知っているため驚きの声をあげる。

「お兄さん、忙しいですか?」

「そうだな。忙しいな」

「残念です」

葉月は理音と遊べないのが残念なようで少し寂しそうに肩を落とすと、

「……そのうち、仕事の関係でそっちに数日だが行くから、時間が空けばな」

「本当ですか　いつ頃、日本に帰るのですか？」

理音は葉月の様子に日本に戻る仕事があると言い、葉月は理音の言葉に笑顔になり、

「え？　理音、日本にくるの？」

「お姉ちゃん、葉月が話してるです」

美波は葉月の口から聞こえた理音が日本に戻ってくると言う話に葉月から電話を取り上げ、葉月は頬を膨らませ、

「ああ。悪いな。そろそろ、切るぞ。これから手術が入っているんでな」

「手術？　あ、あんたは何をしてるのよ！？　だいたい、手術とかしないといけないなら、きちんと体調管理をしなさいよ」

「何？　お前が電話をしてきたんだろ」

理音は時間がないから電話を切ると言うと美波は理音の控えている仕事に驚きの声をあげるが理音は美波が怒る理由がわからないように首を傾げる。

第14問

「おはようございます」

「あれ？ 島田さん、日本語、上手くなったね」

「……明久、そんな直ぐに変わるわけがないだろ。お前の幼なじみがまた何か作ったんだろ」

美波は理音からの新しい翻訳機を付けて登校すると美波の発音が片言ではないため、明久は首を傾げると大柄の男子生徒は呆れたようなため息を吐く。

「雄二、そ、そうだね。島田さん、今度は理音は何を作ってくれたの？」

「えーと、これ。ドイツ語を日本語に直してくれて、日本語はドイツ語に直してくれるみたい」

明久は大柄で一見、不良にも見える男子生徒『坂本雄二』の名前を呼ぶと美波に理音が作った機械の事を聞くと美波は左耳に付けた機械を指差し、

「へえ、本当に天才なんだな。それが明久の幼なじみねえ……居なくなる前にこいつの脳みそも改造すれば良かったのにな」

「何だと！！ 雄二、それはどう言う意味だ！！」

雄二は理音の作った機械に感心したように頷いた後、明久をバカに

し、明久は雄二の言葉に声をあげると、

「島田、それは常に付けてないとダメなんだろ。それなら、許可とかいるだろ。学校つてのは余計なものを持ち込むと直ぐに教師が飛んでくるぜ」

「そうだよ。ボクもさっき、鉄人の前でゲームを落としちゃって、頭に鉄拳を喰らって、ゲームも没収されちゃったよ」

「……明久、それは取られて当たり前」

雄二は教師陣に没収されると面倒だと言うと明久はゲームを生活指導の『西村宗一』教諭に没収されたと肩を落とし、明久の言葉に雄二はため息を吐き、

「うん。理音もそんなような事を言ってた。でも、話したら許可をくれるかな？」

「許可が貰えなかつたら、学校じゃ使えないだけだろ。それにせつかく貰ったものを没収される方が気不味いだろ」

「そうね。ありがとう。坂本、あんた不良みたいだけど優しいのね」

「な、何を言うんだ!？」

美波は自分の事を心配してくれた雄二に笑顔を見せると雄二は慌てる。

「これって、一先ずは西村先生に許可を貰えば良いのかしら? それとも」

「普通は担任からだろ」

「それもそうね。それじゃあ、ちょっと職員室に行ってくるわ」

美波は許可を貰ったために職員室に行くこととするが、

「待て。別に慌てる必要はないだろ。どうせ、もうすぐ、担任がくるんだ」

「そ、そうよね……」

「どうした？」

雄二は美波を引き留めると美波は雄二の言葉に苦笑いを浮かべた後、嬉しそうな表情をすると雄二は美波の様子に首を傾げ、

「やっぱり、会話って必要だなんて、昨日までも言葉はわかったけど、話しているといろいろ見えてくるって思ったの。理音に感謝しないと」

「ノロケかよ」

「ち、違うわよ!？　そ、そうだ。吉井、理音が日本に仕事でくるって行ってたわ」

「ホ、ホント!？　い、いつ?」

美波は電話では素直にお礼を言えなかった事もあるのか少し表情を曇らせるがその様子は雄二にとっては浮かれているようにしか見え

なかつたように小さく肩を落とすと美波は慌てて否定し、話を変えようとしたようで明久に理音が日本に仕事でくる事を話すと明久は驚きの声をあげると同時に美波から知らされた理音来日の情報を詳しく聞きたいように美波に詰め寄る。

第15問

「ごめん。詳しくはわからないの。仕事でくるから、時間が空いたら葉月……私の妹と遊んでくれるって」

「そうなの?」

「うん。ゴメンね」

美波は明久の勢いに苦笑いを浮かべて謝り、

「詳しくわからないって、彼氏の話だろ?」

「だから、違うわよ!」

雄二は先ほどの反撃なのかニヤニヤと笑って理音を美波の彼氏だと言つと美波は顔を真っ赤にして否定した時、

「……島田、それは肯定しているのとあまり変わらぬのじゃ」

「秀吉、おはよう」

「うむ。おはようなのじゃ。明久、雄二、島田も」

ため息交じりで明久と雄二の友人なのか爺言葉を使ったなぜか男子の制服を着た少女が3人に声をかける。

「吉井、坂本、どうして女子が男子の制服を着てるの?」

「ワシは男なのじゃ！？ 自己紹介であれだけ強く行ったであろう
！」

美波はなぜ、少女が男子の制服を着ているのかと首を傾げると少女は自分は男だと声を張り上げ、

「まあ、秀吉、落ち着けよ。島田は日本語が聞きとれなかったんだ。仕方ないだろ」

「う、うむ。そうじゃな。それでは改めて自己紹介をさせて貰うのじゃ。『木下秀吉』。さっきも言ったがワシは『男』なのじゃ」

「う、うん。島田美波よ。よろしくね。木下」

雄二は美波と少女の様子に苦笑いを浮かべると少女は納得いかなさそうな表情だが1度、頷いた後、美波に向かい改めて自分を『木下秀吉』。性別『男』だと話し、美波は秀吉の様子に苦笑いを浮かべて頷き、

「それで、お主らは何をしておるのじゃ？ それに島田、ずいぶん
と日本語がうまくなったのう」

「……秀吉、お前もか」

秀吉は美波が日本語を話している事に首を傾げ、雄二は大きくため息を吐くと、

「リオから送られてきた翻訳機を付けてるんだってさ」

「ほう。それは凄いものじゃのう。明久、お主の幼なじみは本当に

凄い男のようじゃのう」

明久は苦笑いを浮かべながら秀吉に簡単な説明をすると秀吉は感心したように頷く。

「まあ。話を戻すか？ 島田、えーと、明久の幼なじみが日本に来るって話は良いとして、詳しい事がわからないってのはどう言う事だ？」

「それが電話をかけた時間が悪かったらしくて、この後、手術があるからって電話を切られちゃった」

「手術？ 待て。そいつは何をやっている人間だ？」

雄二は美波に理音が日本に来る時の話を聞くと美波は途中で理音に電話を切られた事を話すが雄二はそこで理音に疑問を持ったようであり、

「どう言う事？」

「明久、お前はその理音ってヤツがどの分野の天才か知ってるのか？」

「えーと、知らない」

「島田は？」

「私も聞いてないけど……どうかしたの？」

雄二は美波と明久に理音の専攻分野を確認するが美波は雄二の質問

の意味がわからずに首を傾げると、

「手術って事は医者だろ？ でも、医者がこんなものを作るのか？」

「雄二はこれは理音が作ったものじゃないって言うの？」

「いや、そうとは言わないがちょっと疑問に思っただけだ」

雄二は美波と明久の話から理音の人物像が見えないように首を傾げる。

第16問

「あ。でも、リオは機械いじりとかは好きだったよ。昔からよくわからないものを作ったり、ゴミ捨て場にある電化製品を分解したりしてた」

「そうなのか？ まあ、良いか。俺には天才の考えるような事もわからないからな」

明久は理音が小さい頃の事を思い出しながら当時の話をする。雄二は首を傾げ、

「手術のう……明久、お主の幼なじみは大丈夫なのじゃな？」

「何が？」

「……この間、聞いてしまった『父親殺し』と言う話もあるしこのう」
秀吉は入学式に聞こえてしまった理音の『父親殺し』と言う噂を思い出してしまったようで口を滑らせると、

「『父親殺し』？ って、吉井、どう言う事よ！！」

「ま、待って。島田さん、落ち着いて!？」

「島田、落ち着け。それだと明久は何も話す事はできない」

美波は日本語が聞き取れるようになった事で知ってしまった理音の過去に明久の首を絞める勢いで聞き、雄二は2人の様子に大きなた

め息を吐いて美波を明久から引き離す。

「坂本、放してよ！！ 理音がそんな事をするわけがないでしょ！
！ あいつは無愛想で口が悪くてもそんな事をするような奴じゃな
いわ。吉井、詳しい話を教えなさいよ！！」

「島田も落ち着け。注目を浴びてるから、結構、込み入った話でも
ありそうだしな」

「そ、そうね」

美波は声を張り上げ、雄二は理音の個人情報でもあるため、関係の
ないクラスメート達に聞かせる話ではないと言うと美波は少しだけ
冷静になったようであり、

「場所を変えようぜ。明久、お前も良いな」

「う、うん」

「待つんじゃない。もうHRが始まる時間なのじゃ」

雄二は場所を変えようと教室を出て行こうとし、美波と明久は雄二
の後を付いて行こうとすると秀吉は慌てて3人を止めようとするが、

「サボる。島田の様子からみれば待つてなんかいられないだろうし
な」

「し、しかし、そんな事をするとなまた、鉄人に叱られるのじゃ、休
み時間まで待つんじゃない」

雄二は表情を変える事なく授業をサボると言い切り、美波は雄二の言葉に同意しているようで大きく頷くと秀吉は生活指導の西村教諭に見つかる時に面倒な事になると3人を止める。

「ゴメン。秀吉、あまり聞かせたい話じゃないし、他に人がいないところの方が良いかな……って、どうして、雄二は話を聞く気なの？」

「第3者がいた方が良いだろ。島田の様子を考えると話の途中で明久につかみかかる可能性も高いからな。一応は話が聞こえないように距離くらい取ってるから、安心しろ」

明久は秀吉に謝ると雄二が付いてくる意味がわからないと首を傾げると雄二は2人の話を邪魔する気はないとため息を吐くと、

「ありがとう」

「礼なんか言うんじゃないよ。気持ち悪い。それに俺が余計な事を言っただけだってのもあるしな」

明久は雄二の心づかいに頭を下げると雄二は気恥ずかしいのか頭をかき、

「行くぞ」

「う、うん。島田さん」

「ええ」

「ま、待つんじゃない。ワシも行くのじゃ」

雄二は逃げるように歩き出すと美波と明久は急いで雄二の後を歩き出すと秀吉も慌てて追いかけて行く。

第17問

「吉井、坂本、木下、大丈夫？」

「……大丈夫じゃないかも」

授業をサボろうと教室を出た時に4人は生活指導の西村教諭に見つかつたために教室に連れ戻され、理音の過去の話は昼休みに屋上に移動すると、

「あ、あの。吉井くん、美波ちゃん」

「姫路さん？ どうしたの？」

4人で昼食を広げているところに瑞希が小さなお弁当箱を持って駆け寄ってくる。

「教室に行ったら、あの今朝の騒ぎを聞いてしまって」

「そうなの？ ごめんなさい。私が何も考えずに」

「島田は謝る必要はないのじゃ、ワシの配慮が足りなかつたのじゃ。明久、すまぬ」

瑞希は美波が明久に理音の過去に付いて詰め寄つた事を聞いて駆け付けたようであり、美波は騒ぎになつて申し訳なさそうに肩を落とすと秀吉は重くなつてきた空気に申し訳なくなつてきたようで明久に向かい頭を下げると、

「別に秀吉が悪いわけじゃないし、気にしないでよ。でも……島田さん、理音の過去の事を聞いてもあいつと今まで通り、いられる？」

「え？ どう言う事？」

明久は秀吉に謝る必要はないと首を振ると真剣な表情になって美波に向き直し、美波は明久の質問の意味がわからないようで首を傾げる。

「まあ、あれだろ。明久は島田が彼氏と別れる事になると困ると思ってるんだろ」

「だから、違うって言うてるでしょ！？ しつこいわよ。坂本！！」

「島田、それは肯定しているのと変わるのじゃ」

「はい。そう思います」

雄二は美波をからかうように笑い、美波は顔を真っ赤にして否定するが秀吉と瑞希は苦笑いを浮かべ、

「だ、だから、違うわよ。瑞希もおかしな事を言わないでよ」

「あれ？ み、美波ちゃん、いつの間にそんなに日本語が上手くなつたんですか！？」

「……明久、あいつは姫路って言ったか？ お前達の会話から姫路も前田の友人なんだろ。どうして、前田が作ったものと気付かないんだ？」

美波は慌てて瑞希に否定するがそこで瑞希は美波が日本語を話している事に驚きの声を上げ、雄二はど天然の瑞希の様子に大きく肩を落とす、

「姫路さん、落ち着いて、一先ずは理音が作ったものでドイツ語を日本語に日本語をドイツ語に変換しているらしいんだ」

「そうなんですか？ でも、それを学校に持ち込んでも良いんじゃないか？」

「一応は暫定的に許可は下りたみたいだぞ。担任や学年主任でも答えは直ぐに出せないから、学園長を交えての職員会議で結果を出すつてよ」

「ええ。とりあえずは直ぐに没収されなくて良かったわ。せつかく、理音が作ってくれたものだし、没収されたらなんて言ったら良いかわからないし」

明久は苦笑いを浮かべながら、瑞希に美波が日本語を話している理由を話すと瑞希は校則違反として没収対象にならないか心配なように首を傾げ、美波と雄二は暫定的な許可が下りてる事を話す。

「暫定的ですか？」

「うん」

「それより、姫路、立ってないで座れよ。秀吉、さつさと飯を済ませようぜ。俺と秀吉は前田の話で考えると完全に部外者だしな。立ち入った話の時は退散しないといけないからな」

「う、うむ。そうじゃな」

瑞希が理音の翻訳機の処置に首を傾げている様子に雄二はため息を吐いて昼食を済ませると言つと秀吉は賛同したようで大きく頷き、

「は、はい。失礼します……あ、あの」

「坂本雄二」

「木下秀吉なのじゃ」

「ひ、姫路瑞希です。よろしくお願いします」

瑞希は明久の隣に座ると雄二と秀吉の名前を知らないため、どうしたら良いかわからないようであり、雄二と秀吉は瑞希の様子に苦笑いを浮かべて名前を名乗ると瑞希も自分の名前を名乗った後、深々と頭を下げる。

第18問

「へえ、それじゃあ。明久と姫路は小学校が同じなのか？」

「うん。中学からはあまり話す事もなかったんだけど、島田さんが理音と会ったって聞いて、身体が動いちゃって、それで」

昼食を食べ始めると雄二は明久と瑞希の関係を聞くと明久は女子の制服を着たまま駆け出して行ってしまった事を思い出したようで、まずそうに視線を逸らすと、

「えーと、久しぶりだったんですけど、吉井くんの格好に全部、吹っ飛んでしまいました」

「と言うか、俺なら他人のふりをするぞ」

「雄二の意見に賛成なのじゃ」

瑞希は苦笑いを浮かべて、疎遠になっていた事も全て吹き飛ばして、またと笑うが雄二と秀吉は自分の知り合いが女装をして駆け寄ってきた時の事を考えたようで明久に哀れむような視線を向け、

「私だって、吉井と初めて会った時に正直、どうしようかと思ったわよ」

「し、仕方なかったんだよ!? 入学式の日には寝坊しちゃって慌てたから、間違って姉さんの中学時代の制服を着ちゃったんだよ!？」

「……いや、慌ててたって姉貴のそれも中学時代の制服をひっぱり

出さないだろ」

美波は大きく肩を落とすと明久は慌ててその時の事を弁明するように叫ぶが雄二は大きく肩を落とし、

「……慌てている時のその人間の素が出ると言っしもの」

「あ、あの。それは吉井くんが女装趣味を持っているって事ですか」

「ジャストモーメント、姫路さん、ボクにはそんな趣味はないから……あつ！？ ボクのカロリーが！？」

瑞希は明久に女装趣味があるのではないかと心配そうにつぶやくと明久はそれだけは否定したいようで勢いよく立ちあがるがその時に自分の弁当箱をひっくり返してしまい、世界が終るような悲痛な叫び声をあげる。

「明久、騒ぐな」

「だ、だって、久しぶりの塩と水以外のお弁当だったのに」

「塩と水がお弁当？ あんた何をしてるのよ。前田もご飯を食べないって言ってたけど、あんた達の中でご飯を食べない約束でもあるの？」

雄二は明久の叫び声に眉間にしわを寄せると明久は涙を流しながら落ちたおかずに視線を向けており、明久の言葉に美波は大きくため息を吐き、

「あ、あの。前田くんがご飯を食べてないってどう言う事ですか？」

「何か、研究が忙しくなったりすると簡単に抜いちゃうらしいのよ。この間、話したら、1日半くらい食べてないって言ってたし、食べてる時も何を食べてるか心配よ」

瑞希は理音の食生活に首を傾げると美波は理音の体調を心配しているようであり、表情を曇らせた時、

「彼氏の栄養面を心配するなんて島田、よくできた彼女じゃないか」

「だから、違うって言うてるでしょ!!」

雄二にからかわれて直ぐに顔を真っ赤にするが、

「あ、あの。実際、美波ちゃんは前田くんの事をどう思っているんですか？」

「な、何？ いきなり、どうしたのよ。瑞希」

「やっぱり、あの、気になりますし、自分の恋愛の参考にもしたいですし」

瑞希は同年代の女の子の恋愛感が気になるようであり、顔を少し赤らめながら美波に理音との関係を改めて聞く。

第19問

「だ、だから、私と前田はそういう関係じゃないって言ってるでしょ。だいたい、2回しか会った事だっただけだし、電話だって毎日かけてるわけじゃないし、口は悪いし、愛想なんてないし、そ、それに……」

美波は瑞希に聞かれて顔を真っ赤にしたまま理音との関係を思い出すと、

「……私、告白もしてないし、されてもないし、それなのに私が理音の過去を聞いても良いの？」

理音と知り合ってから、時間も余り経ってなく、恋人ではない事を思い出して理音の過去に踏み入って良いのかと疑問に思ったように小さくつぶやき、

「美波ちゃん？」

「な、何でもないわよ!？」

「いや、その返しは明らかに何かあったからな」

瑞希が美波の顔を心配そうに覗きこむと美波は慌てて何もなかったと言った雄二は美波の様子にため息を吐く。

「あ、あのね。吉井、私は理音の過去を聞いても良いのかな？」

「え? どうしたの?」

「よく考えたら、私は理音と数回しか会ってないわけだし、吉井や瑞希と違って友達として理音に分類されてるかもわからないから」

美波は不安そうな表情で理音と自分の関係を考え直したようであり、立ち上がると屋上から逃げるように駆け出して行き、

「し、島田さん！？ 待ってよ！？」

「美波ちゃん、待ってください！？」

「明久、姫路、追いかけるな」

明久と瑞希は慌てて美波の後を追いかけてよつと立ち上がるが雄二は2人の腕をつかみ、2人を静止すると、

「雄二、どうして、止めるのじゃ？」

「島田なりにも考える事があるんだろ。流石に俺もからかい過ぎたしな」

「で、でも」

秀吉は雄二の行動に首を傾げると雄二は美波が駆け出して行った意味を理解できたようで少し気まずそうに指で首筋をかくが明久の表情は納得がいつていないようであり、

「『父親殺し』って内容だ。事実がどうであろうと覚悟のない人間が聞く事でもないだろ？ 今朝は勢いで聞きたいって感じだったからな。島田がお前達の幼なじみとの事を考えて真剣に今の関係より

先に進みたいと考えたら、自分で本人に聞くだろ。正直、お前達が話している事かも疑問だ」

「う、うん」

雄二はため息を吐きながら自分が2人を止めた理由を話すと2人は雄二の言葉に納得する部分も多いためか頷き、

「それなら、昼食を済ませてしまおうかのう。結構、話し込んでおつたしのう。時間が……明久、今更じゃが、お主、今日はどうして弁当じゃったのじゃ？ いつもは塩と水であろう」

「う、うん。昨日、理音のおばさんが夕飯を作り過ぎたって言って夕飯をごちそうになったんだけど、その時にお弁当も作って貰ったんだよ。この間のお礼だって」

秀吉は明久が弁当を持ってきた事に首を傾げると明久は先ほど落したお弁当を見て血涙を流し始め、

「……明久、ゲームやマンガに金を使いたくなるのはわかるが食費くらいは確保しろよ」

「仕方ないんだよ。この世にはボクを惑わす物が多すぎるのが悪いんだから」

「……吉井くんはお弁当を持ってきてないんだ」

雄二は明久の生活に大きいため息を吐き、明久が雄二に言い返している様子に瑞希は何か思いついたようで小さな声でつぶやく。

第20問

(……学園長室に呼び出してこれに何かあるのかな?)

美波は理音と連絡を取る事もできずに3日ほど過ぎた時、学園長室に呼び出され、

「1年Dクラス、島田美波です」

「入ってきたな」

「失礼します」

美波は学園長室のドアをノックすると中から、学園長らしき女性の声が聞こえて美波はドアを開けて学園長室の中に入ると、

「あんたが、島田美波かい？」

「は、はい」

「知ってると思うけどあたしが学園長の『藤堂カヲル』だよ」

学園長室の奥の机には1人の老婆が座っており、美波を見て鋭い視線を向けると美波は1学生が学園長と対面して話す事はあり得ないため、慌てて頭を下げると学園長は『藤堂カヲル』と名乗り、

「は、はい。あの。それで」

「悪いね。あんたのその翻訳機を見せてくれるかい？」

「は、はい」

カヲルは美波を学園長室の真ん中にあるソファ―に座るように言った後、美波に翻訳機を見せて欲しいと頼み、美波は慌てて理音から貰った翻訳機をカヲルに渡す。

「……まったく、よくできてるね」

「あ、あの。やっぱり、凄いものなんですよね？」

カヲルは美波がドイツからの帰国子女と言う知らせを受けているように美波にドイツ語で話しかけながら、理音の翻訳機を見て感心したように頷くと美波は改めて理音が作ってくれた翻訳機を覗き込みながら聞き返し、

「そうだね。翻訳機を作れる人間はいるかもしれないがここまでの小型化は簡単にはできないだろうね。まったく、こんなものを作る人間は次から次に出てくるなんてイヤになるねえ」

「そうなんですか？」

カヲルは科学者として出てくる後輩達の勢いのため息を吐くと美波はカヲルの様子に首をかしげ、

「それで、聞きたいんだけど、これを作った人間と連絡は取れるのかい？」

「連絡？ 理音とですか？」

「理音？ …… これを作ったのはあのくそじやりかい。それなら、納得がいくねえ」

カヲルは美波に翻訳機を作った人間の事を聞くと美波は理音の名前を出し、カヲルは理音と知り合いなのか全てが納得が言ったように頷くと、

「しかし、何も知らない女の子を捕まえるなんてあのくそじやり、父親の血をしつかりと受け継いでいるじゃないか」

「あ、あの。学園長先生は理音と知り合いなんですか？」

「ああ。あのくそじやりの父親とは知り合いでね、あたしがあのくそじやりに留学先を進めたのさ」

カヲルは美波の顔をじろじろと見ると大きく肩を落とし、美波はカヲルの様子に理音とカヲルに関係があると思ったようで理音との関係を聞くとカヲルは自分が理音の留学先を進めた本人だと話す。

「そうなんですか？」

「ああ。しかし、あのくそじやりだつて言うのは好都合だね。島田つて言ったね。あんた、くそじやりに連絡を取つて、文月学園のスタッフとしてこっちに戻つて来るように言いな」

「へ？ 学園長先生、いきなり、何を言うんですか」

カヲルは翻訳機を作った人間に文月学園の召喚システムを研究する人材に招きいれようと思つていたようで美波に理音へと連絡を取るように言うが美波は突然の事に驚きの声をあげ、

「何だい？ 連絡先も知らないのかい？」

「知ってはいますけど、話が飛び過ぎてて、それにこの翻訳機を学園に持ち込んで良いのかと言う話じゃなかったんですか？」

「ん？ そうだね。それなら交換条件だよ。あんたがあのかそじやりを説得できれば許可を出してあげるよ」

「そ、そんな、むちゃくちゃです」

カヲルは翻訳機を学内で使うための条件を出し始め、美波はあり得ない条件に肩を落とすと、

「そうだね。とりあえずは、あたしと話をするようにあのかそじやりに伝えな。あたしが電話をすると話も聞かずにあのかそじやりは電話を切るからね」

「それくらいなら」

カヲルは理音と連絡を取りたいようであり、美波は引き下げられた条件に頷く。

第21問

(理音に連絡を取らないといけなのか。でも……)

美波はカヲルから出された条件に理音に連絡を取らないといけなのだが、自分と理音との関係がはっきりとしていないため、連絡を取るのをためらっているようだったのでしたら良いのか悩みながら家のドアを開け、

(あれ？ 誰かきてるの?)

玄関に見なれない靴が置いてあり、美波は首を傾げた後、

「ただいま」

「お姉ちゃん、お帰りです」

「遅かったな」

美波が居間に顔を出すと葉月と理音と一緒にソファーに座っており、

「……………あんだ、何をしてるのよ!？」

「ん？ しばらくしたら日本に仕事でくると言っていただろ。葉月と約束をしていたからな」

美波は頭の処理が追いつかないようであれば額に指をあてて自分を落ち着かせると理音を怒鳴りつけるが理音は表情を変える事なく先日の葉月との約束を守っただけだと言い切る。

「まったく、来るなら来るで先に連絡を入れるとかできないの？」

「まあ、最初はそのつもりだったんだがな。仕事の前準備もあつたし、今日は来るつもりはなかったんだが、商店街で葉月に捕まつてな」

「お兄さんを見つけて、葉月、びっくりしたです」

美波は自分を落ち着かせるために着替えを終えて居間に戻ってくる
と自分の鼓動が速くなっているのを理音にはれないように気をつけ
ながら理音の常識のなさを責めると理音は実際は商店街で葉月に捕
まつたと白状し、葉月は美波に理音を見つけた事を誉めて欲しいの
か美波の顔を覗き込むが、

「ねえ。理音、仕事で日本に戻ってきたって言ってたけど、どれく
らい日本に滞在するの？」

「今回は2週間くらいだな。まあ、日本にいると言っても大学の特
別講義もあるから、この街にいる時間は4日くらいだな」

「あ、あのさ。その時に時間ってある？」

「ん？ どうかしたのか？」

美波はカヲルから言われた事もあるため、理音に滞在期間を確認す
ると理音は美波の様子に何かあると思つたよう首をかしげ、

「あ、あのね。理音がくれた翻訳機なんだけどそれを見た学園長先
生が理音に会えないかって」

「あの妖怪がか？ ……美波、あの妖怪、どんな条件を出してきた？」

美波はカヲルが理音と連絡を取りたいと言っていた事もあるため、申し訳なさそうに言う。理音は美波の様子にある程度の事を理解したよう。美波に聞き返す。

「あ、あのね。これを文月学園で使うなら、あんたを文月学園の召喚システムのスタッフに参加させるって」

「……あの妖怪、ずいぶんとむちゃくちゃな条件を出してきたな」

「お姉ちゃん、それはお兄さんが日本に住むって事ですか？」

美波はあり得ない条件を取りあえずは理音に伝えるが当然、理音の眉間にはしわがより、カヲルの条件に呆れているようだ。葉月は理音の事が気に入っているようで嬉しそうに理音の腕に抱きつくが、

「葉月、そう言う事じゃない。まあ、あの妖怪の事だ。とりあえずは俺に話を聞くらいいはしろって事なんだろう」

「うん。理音は学園長先生の電話を直ぐに切るから話にもならないって」

「……わかった。とりあえず、時間を作って妖怪と話だけはしてくる」

理音は今のところ日本に戻ってくる気もないよう。カヲルと話す時間だけは作ると頷く。

第22問

「良いの？」

「良いも何もそうでもしないとせつかく、作ったものが無駄になるだろ。道具は使わないと意味をなさないんだ。使う価値のない物は存在している理由もないんだ。ただのゴミになるだろ」

美波はカヲルと会う事を了承した事に驚きを隠せないようだが理音は彼の考えがあるようであり、表情を変える事なく気にする必要はないと言つと、

「お兄さんは日本に住むつてわけじゃないんですか？」

「ん？ 現状で言えば何も言えないな。妖怪が勝手に言ってるだけだしな。確かに召喚システムの研究、開発は俺にとつても携わつてみたいものではあるが、俺がそれをやる資格があるかと言われるとな」

「資格？」

葉月は理音と美波の話が難しいのか単純に理音が日本に住むかどうかだけを聞かせて欲しいと首を傾げ、理音は葉月の頭を撫でながら今は何とも言えないと言つた時、美波は理音の言葉に何か感じたように小さくつぶやき、

「美波、どうかしたか？」

「な、何も無いわよ。そ、それより、学園長先生に会つて事は文

月学園に顔を出すのよね。せつかくなんだし、吉井や瑞希に会ったら……ねえ。理音、怜生くんやお母さんと会わないの？」

理音は美波のつぶやきは聞こえなかったようだが何かあったかと思うと美波は慌てて何もないと答えた後に明久や瑞希が理音に会いたがると思うからと言いかけるが、先日、会った理音の母親の怜奈と弟の怜生の表情を思い出したようで理音の上着のシャツの裾を握りしめて聞く。

「……会う気はないな」

「理音、ごめん」

美波の口から出た怜奈と怜生の名前に理音の言葉は異様なくらいに冷たく変わり、美波は理音の変化に自分が触れてはいけないものに触れてしまった事に気づいて目を伏せて謝ると、

「お兄さん、どうかしたですか？」

「いや、何もなし」

葉月は2人の様子に心配そうに理音の顔をのぞき込み、理音は葉月の様子に言葉から冷たさが取れ、

「理音、ごめん」

「……気にするな。お前は関係ないんだ」

「関係ない……」

美波はもう1度、理音に謝ると理音は美波には関係ないと言い切り、美波の表情はその一言で暗く沈んでしまい、

「そ、そう言えば、理音、仕事で日本に戻ってきてるって言うってたけど、どんな仕事なの？」

「ん？ メインは如月グループとの打ち合わせだ。それ以外はさっきも言ったが大学での特別講義」

「大学での特別講義はわかるけど、如月グループとの打ち合わせって何？」

美波は話を変えようと理音の日本での仕事を聞くが理音の答えに美波は首を傾げる。

「来年の春過ぎの完成予定で如月ハイランドと言うテーマパークができるんだ。その遊具の安全装置等の設計、開発を頼まれてな」

「遊園地ですか？ 葉月、行きたいです」

葉月は理音の言葉に遊園地に行きたいと理音の服を引っ張って目を輝かせる。

「チケットは送ってやるから、来年、美波にでも連れてって貰え」

「葉月、お兄さんと一緒に行きたいです」

理音は興味がないようで家族と行くように言うが葉月は目を輝かせたまま、理音の服を引っ張りながら、理音と一緒に良いと言い、

「……日本に居ればな」

「理音、あんた、葉月に甘いわね」

理音は葉月の様子に折れ、美波はため息を吐くと、

「よくわからん。それより、そろそろ、時間なんだが」

「お兄さん、帰っちゃうですか？」

「ああ。この後にも予定があるんでな」

理音は首を傾げた後に時間を確認するとここに居れる時間は終わりと話し、

「葉月もわがまま言わないの。理音、また……あ。ちょっと待って。理音のシャツ」

「ん？ 捨てても良いと言っただろ。それに悪いな。本当に時間がない」

「……あんた、いつも時間に追われてない？」

「仕方ないだろ」

「お兄さん、また、今度です」

美波は理音のシャツの事を思い出して部屋に戻ろうとするが理音は時間がないため、島田家を出て行く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2421y/>

サドで邪悪な召喚獣 i f ~ another sky ~

2011年12月29日15時47分発行